



サステナビリティ海外事例 VOL.7

女性視点にはサステナビリティはこれから外せないテーマ。暮らしを通じて地球環境や社会に役立つ自分でありたいと思う女性たちの意識は年々上昇している。そうした視点をビジネスの現場に先行して取り入れている海外事例をよく知る安並氏に、現地レポートからヒントをいただきます。



井関産業株式会社
代表取締役社長
安並 潤

容器包装資材の販売、セールスプロモーション事業などの展開を行う中で、サステナビリティを経営のベースとし、経営革新とイノベーションに取り組み。北欧スウェーデンを中心に、サステナブルな仕組み、モデル、商品開発、行政、教育機関、都市計画をベンチマークし、自社の経営に取り入れる。

地球上でもっともサステナブルなホテル まるでアナ雪の世界のような「Ice Hotel」

建設資材は氷だけ。

春には溶けて自然に返る、冬季限定ホテル

さて今回は、半年ほどの営業で予約も取りにくい、「Ice Hotel アイスホテル」をご紹介します。全て水で作られ、暖かくなると溶けてしまう。世界中から観光客が訪れる、アナ雪のお城のようなホテルとは……。

スウェーデン最北の都市、キルナから少し離れた場所に、ユッカスヤルビという村があります。12月に入って寒さが増す頃、アイスホテルは、ユッカスヤルビを流れるトルネ川から切り出した約5000トンの氷だけで建設されます。建設資材は氷だけで、釘を

打ったり、壁を塗ったりすることはありません。アイスホテルは12月から翌年4月ごろまでオープン。予約を取るのもなかなか難しく、ほぼ満室の状態が続くそうです。

この地方は、北欧のなかでもラップランドという地域で、冬場はマイナス30度にもなり、ほとんど太陽を見ることはありません。オーロラがよく見える村でもあり、雪と氷に閉ざされ、決して明るいイメージはありません。ユッカスヤルビの人口はたったの600人ほど。北方少数民族のサーミ人が多くを占めます。サーミ人は以前、差別の対象であり、「サーミの血」という映画にもなりました。そんな村に年間5万人ほど、人口の100倍ほどの観光客がやってきます。その中でもアイスホテルはシンボリックな観光名所で、雪原

のなかに氷の建物が建っている。自然の厳しさの中に、巨大な芸術作品がドンと構えています。とても幻想的な風景です。

地の利を生かした観光スタイル。

どんな地域にも資源は存在する

アイスホテルの中は、約マイナス5℃。氷点下の部屋に寝泊まりするのです。もちろんトナカイの毛皮に包まって、防寒はしっかりと行います。部屋数は約50室、全ての部屋はコンセプトもデザインも異なります。資材は氷だけ、部屋数と同じ人数のデザイナーが、氷を削り組み立てていきます。それぞれが個性的で、すべての部屋に泊まってみたいくなります。氷の教会もあり、結婚式も行われるとのこと。また「Ice Bar アイスバー」も併設され、飲み物は氷のグラスでいただきます。敷地内にはサウナやショップもあり、要するに「氷でできた普通のホテル」なのです。

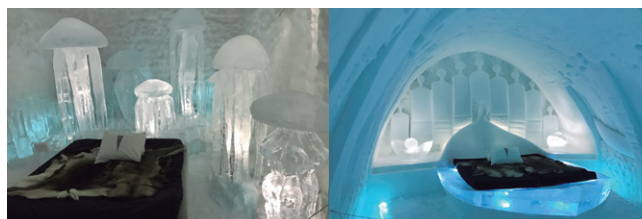
このような北の果ての村に、その地ならではの特徴を生かした観光地を造り、地域経済の大きな支えになっています。何も無いように見えても、知恵と工夫で価値創造をすることは十分可能。さらに、自然が作り出す大量の氷という天然の素材を利用し、サステナブルな観光業を成立させていることに驚いてしまいます。このアイスホテルには、実は日本も関わりがあり、札幌雪祭りの雪の彫刻にヒントを得たともいわれています。

私が今一番懸念していることが地球温暖化。毎年北極圏の氷がどんどん溶け出している現実、今後アイスホテルへの影響を懸念せずにはられません。



大雪原にたたずむ幻想的なアイスホテル

氷製のアイスグラス。唇で感じる絶妙な冷たさ



部屋ごとにデザインの異なる客室



日帰り観光スポットとしても人気のアイスバー



世界中から挙式希望者が訪れるチャペル